

「夢が与えられる時には、必ず実現する力も与えられる。しかし、そのために君は、努力をしなければならない。」英語の参考書に載っていた、リチャード・バックの言葉だ。

僕が東京大学見学会・企業・大学訪問に参加を決意した理由は、未だ漠然とした将来を見据え、著名な方のお話を聞き、少しでも将来のビジョンが明瞭になればと考えたからだ。僕の将来の目標は、芸術に携わる仕事に就く事だ。絵画、書籍、演劇といった分野に挑みたいと考える中、大きな不安も存在する。その一つが、収入の不安定さである。著名度、それに伴い実力が問われる分野なので、収入が他の職業と比べて低い、あるいは不安定である。また、好機に恵まれその分野の先端を駆けるような人物になれたとしよう。だが、それによって将来が保証される訳では無い。1年後までの計画はあっても、3年後、5年後の見通しは無いのだ。

最初のガイダンスで、希望職種のアンケートを元にした資料が配布された。その資料を見て、僕は少なからず驚いた。参加者の大部分が医者、研究者志望だったからである。仙台第二高等学校は県内でもトップに位置する進学校だ。なんら不思議な事では無い。しかし、僕はその資料に圧倒された。医者になるのはとても困難な道を歩む事になるというのは僕でも承知している。一流の知識、豊富な経験の蓄積、求められる技術は数多だ。そのような道に果敢に挑もうとする彼等が、僕は純粹に輝いて見えた。しかし、それと同時に僕は強く不安に思った。彼等が万が一僕の将来の目標を聞いたなら、どんな反応をするのだろうか。どうせ叶わない。現実を知らない。夢を見過ぎ。そのような風に思われるのでは無いかと、不安で仕方が無かった。夢は堂々と語りたい。でもそれが出来ないと葛藤している中、冒頭で紹介したリチャード・バックの言葉に出会った。何を行うにしても、努力は欠かす事の出来ない最も重要な要素だ。まずは何か行動を起こそう。東京大学見学会・企業・大学訪問は正に行動、努力の起点として打って付けだと思った。

ディレクトフォース。笹川平和財団・日本財団の方々が僕達の為に企画を催してくださった。「世界を視野に、自らを生かす。」をテーマに、将来の進む分野に関わらず、グローバルな視点や視野を身に付ける事が狙いだ。日本と諸外国とを比べた際の良い点と悪い点、文化的、宗教的な価値観の違いを元に、異国の地で様々な経験をした博識のある方々から聞く話はどれも新鮮で実体験の様に嬉しく思えた。

財団の皆さんが、グローバル化に対応していく上で、口を揃えて大切だとおっしゃっていたのが、「言葉で議論出来る様になろう。」という事だ。日本はグローバル化に対し、他国に比べて若干脆い所がある。それは日本が島国である、という事だ。良くも悪くも戦争を除いて、他国と直接争う事が少ないのだ。これは、日本人の特性を如実に表していると言える。自分の伝えたい事を直接でなく、それとなく意図された言葉、仕草、表情を以って伝えようとする。それは同じ日本人でこそ通じるのであり、外国人に対してそれでは伝わらないという事だ。「空気を読む」という言葉が最も顕著な例えだろう。そんな言葉、ロジックが苦手な日本人には、やはり言葉で議論出来る様になって欲しいそうだ。折角、他国に、引けを取らない知識があるのに、それでは勿体無いと。

日本人と他国の人々との相違点は他にもある。それは、自分の国、歴史に誇りを持っているかどうかという点だ。発展途上国の人々は、自分の国、歴史に誇りを持つ人が多いのだそうだ。

やはりここでも僕は日本が島国である事が関係しているのでは無いかと考える。隣国と密接している国は、国同士の関係を重んじると同時に、自分の国と隣国とを照らし合わせ、自分の国の良い所を、認識出来る機会が多いからだ。その様にして、切磋琢磨して自分の国を磨き上げてきたからこそ、自分の国に誇りと団結心を抱いているに違いない。一方で日本人はどうだろう。日本の歴史。誇るべき点。一体何人の人がこれに対し即座に答えられるのだろうか。悪い点ばかりに目がいってしまい、良い点が中々出てこない。長所は自覚、認識しないと成長出来ないのだ。また、性別の役割にまだこだわり過ぎている所があるので、それを無くす事も必要だとおっしゃっていた。

グローバル化が進む上で日本若しくは日本の経済に与えられる影響としては、移民労働力に仕事を奪われる可能性があるという事だ。グローバル化にはメリットも多く存在するがデメリットも存在するのである。しかし、労働力の移動はやむを得ない事なので、それに負けない様な人材になる事が重要だとおっしゃっていた。特に日本は、少子高齢化により、経済が衰退してしまう恐れがあるので、社会保障の対応を充実させ、勝ち抜き競争を支えるリーダーの存在が必要だ。では、これからの日本を支える為に僕は何をすべきなのだろうか。仕事をする上で経験、体験が生きてくるという事を教えてくださった。仕事は常に計画通りにはいかないものなので、それをどの様に理想の状況に運ぶか、手際の良さが、求められる。その上で仕事に対するビジョンを持ち、代替を瞬時に立案、実行出来る力が必要だ。その為には敢えて学校という枠に囚われない事も重要だという。また、十代後半で出来る事を大切に、大学プラスアルファで何かに挑戦しようという助言をいただいた。今にしか出来ない事を一つ一つ大切にしていこうと思った。

企業・大学訪問では東京芸術大学に話を伺いに行った。話を伺ったのは、音楽学部器楽科の有森博先生だ。芸術大学は、技術レベルの高い人間が集まり、入学した時からプロ意識を持っている人が多いのだそうだ。一流の音楽家を目指す道のりは長い。大体 30 歳位まではコンクールに参加し、ピアニストとしてのキャリアを積まなければならない。そして、信頼と実績を得て、日本の大学の先生、教授、海外で活躍していく。音楽家のみならず、全ての芸術家に当てはまる事だが、自分の性質をよく知り、自覚する事が大事だそうだ。日々の練習の積み重ね、人前での精神力の強さ、自分との戦いになるからだ。また、生活の基盤を安定させる上で、自分がどの様な芸術家になりたいのかを明確にし、芸術一筋で生計を立てるのか、副業を行い生活していくのか、その様な指針を最初にはっきり決める必要がある。それにより見通しを持った計画を立てる事が出来るからだ。友人を大切にし、違う価値観、物の見方を養う事も重要だ。最後にものを言うのはやはり、自分の携わっている仕事が好きかどうか、やりたいかどうかだ。初心忘るべからず。最初の気持ちを忘れずに好きなものの為に努力をすれば、どんな困難も乗り越える自信がつかはずだ。芸術に対する愛を忘れてはならない。

以上の事を有森博准教授から伺った。芸術を生業としている方に今回のような言葉を聞いたのはすごく心強く、的確なアドバイスを頂き、将来に対する期待を持てる様になった。また、必ずしもその道一筋で進む必要は無いという事、様々なルートがあるので自分に合っているルートを見つけるという事が心に残った。生活の安定を図る為に副業しても良し。大切なのはなりたい芸術家のスタンスを見失わない事。僕は有森博准教授から勇気を貰った。また、この研修で将来について語り合える友人を得る事が出来た。この研修から一步一步着実に将来へ進んでいければ、と思う。